

「良民」による「良キ政府」を作るために —『学問のすゝめ』を再読して—



理事・拓殖大学政経学部教授 丹羽文生

明治日本を代表する言論人の1人、1万円札の肖像画にもなった福沢諭吉と言えば、『学問のすゝめ』の著者として有名である。『学問のすゝめ』は、明治5(1872)年2月から明治9(1876)年11月まで段階的に発行、全17編で構成されている名著である。累計約340万部の大ベストセラーとなり、当時、日本人の10人に1人が購入したらしい。

本書は「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ人ノ下ニ人ヲ造ラズト云ヘリ」との一節で始まる。アメリカ独立宣言の一部分を意識したものと言われているが、これは単に人間平等を唱えた言葉ではない。事実、本書を読み進めれば理解できるが、福沢は、人間は学ぶか学ばないかによって「差」が出て来ると論じている。福沢が目指した新たな日本とは、自ら学び、自ら「独立」した国民によって形成される国家であった。

『学問のすゝめ』の初編が出版されたのは、日本が西洋のシステムや文化を取り入れて近代化への道を歩み始めたばかりの時期だった。ただ、福沢の考える近代化とは、決して、そのような上っ面だけのものではなかった。国民それぞれが日本を背負って立つという気概を持って学問に向き合うことこそが、近代化への大きなエネルギーになると見ていたのである。所謂「独立自尊」である。福沢の戒名は「大観院独立自尊居士」、

まさに「独立自尊」という4文字こそが、福沢の生涯そのもののなのである。

思うところがあって、『学問のすゝめ』を再読してみた。その中に「西洋ノ諺ニ愚民ノ上ニ苛キ政府アリトハコノ事ナリコハ政府ノ苛キニアラズ愚民ノ自カラ招ク災ナリ 愚民ノ上ニ苛キ政府アレバ良民ノ上ニハ良キ政府アルノ理ナリ 故ニ今我日本国ニオイテモ此人民アリテ此政治アルナリ」との一文が出て来る。「愚かな民衆」の上には「愚かな政府」がある。それは決して「政府が愚か」なのではなく、「民衆が愚か」なのである。逆に言えば「良き民衆」の上には「良き政府」があるということになる。

では、「良き民衆」による「良き政府」を作るには、どうすればいいのか。答えは1つである。国民が学び続けるしかないのである。

福沢が生きていた頃に比べれば、高等教育を受ける国民の数は圧倒的に増えているはずである。ところが、私たちは、何か不満があると、やれ政府が悪い、政治家が悪いと愚痴を洩らす。しかし、そんな政府や政治家を選んでいるのは私たち国民である。批判を口にする前に、まずは全ての原因が自分にあることを自覚した上で学び続けることが重要ではないか。それこそが、現代の日本人に今でも福沢が問うている「独立自尊」の基本中の基本であると言えよう。